

## 巻頭言

# 沈黙の情報について (Silent Information)

横井 利彰



「その人」は、画面をじっと見たまま、何も質問をしなかったという。

これは、私が2023年4月末に、学会のあとでシリコンバレーのコンピュータ歴史博物館の「Alto 開発 50 周年記念展示」を訪れた際に、展示スタッフとして居た、Alto (アルト) の開発者の一人から直接聞いた話である。「その人」とは、Apple 創業者の一人であるスティーブ・ジョブズ氏であり、初めて Alto という縦長ディスプレイで世界初のグラフィカル・ユーザ・インタフェースを備えたコンピュータの説明を受けていた。

あの饒舌なジョブズ氏が、じっと画面を見つめて沈黙していたのだという。これがもし、Apple 共同創業者で、Apple II を設計したスティーブ・ウォズニアク氏 (情熱的なアーティストとも称される) であれば、ハードウェアやソフトウェアの質問を矢継ぎ早にしたのではないか。では、ジョブズ氏はなぜ沈黙していたのだろうか。外から彼を見ていても、ただじっと画面を見つめるだけとしか映らないだろうが、きっと凄まじく頭が働き、その先には、自分ならどんな使い勝手のシステムを実現できるか、思いを巡らしていたのではないだろうか。「沈黙」のスティーブ・ジョブズにエンパシーを抱いて良いなら、そう想像できる。

この時期の Apple の状況は、Apple II (1977 年発売) が表計算ソフト VisiCalc のおかげで、ゲームマシンから、ビジネスでも使えるパーソナルコンピュータへと社会の評価が変わる時期である。スティーブ・ジョブズ氏とスタッフは、Xerox 社との難しい交渉の末、取引としてゼロックス パロアルト研究所を訪れて Alto を見たらしい。当時、Apple では Sara と Lisa というプロジェクトが進んでいたが、スティーブ・ジョブズ氏は Lisa プロジェクトを降り、1981 年 1 月にジェフ・ラスキン氏から Mac プロジェクトを引き継ぎ、あの Macintosh 128K を発売 (1984 年) し、時代の牽引者になってゆく。Alto を見たときの「沈黙の情報」は、Mac 以降の発展を暗示していたのかもしれない。

「沈黙」が情報となる例がほかにもある。イギリスの物理学者ディラックが訪日した際に教えたパズルで、「赤い帽子と白い帽子」として広まったものがある。「赤い帽子が 3 つと白い帽子が 2 つある。3 人の「普通の人」①, ②, ③に、三角形の頂点の位置に椅子に向き合って座ってもらう (互いに他の 2 人の様子は見える)。3 人に目をつぶってもらって、一つずつ帽子をかぶせて残りは隠す。すると自分の帽子の色はわからないが、他の二人の帽子の色はわかることになる。」

実は 3 人とも赤い帽子をかぶせているのだが、この 3 人の立場で見ると、自分の帽子は赤の可能性も白の可能性も残るので、3 人ともわからないので「沈黙」が起きる。しかし面白いのは、「3 人とも沈黙した瞬間」に、このことが情報となり、その直後に「普通の人」である 3 人とも、自分の帽子の色が赤だとわかるのである。それは、最初に「3 人とも沈黙」するのが、全員が赤い帽子をかぶっている場合しかないからである。

情報セキュリティで考えると、「何もインシデントが起きていない」という「沈黙の情報」は、安全だといえるのであろうか。世の中で頻繁にインシデントが起きていることを前提に考えると、数千人が毎日、パソコンやスマートフォンで情報アクセスを行う大学で、何も起きていないという「沈黙の情報」は、むしろ疑問でもある。情報がなくとすれば、それはどこかで情報が滞っているともいえる。「自分たちは観測できていないのではないかと、疑ってかかり、「沈黙の情報」に気づく「想像の視点」も大切なのではないだろうか。